

## Close Quarters について (II)

吉村, 治郎

<https://doi.org/10.15017/221>

---

出版情報 : 九州大学医療技術短期大学部紀要. 19, pp.61-68, 1992-03. Kyushu University School of Health Sciences Fukuoka, Japan

バージョン :

権利関係 :

## Close Quarters について (Ⅱ)

吉村治郎

### A Study of *Close Quarters* (Ⅱ)

Jiro Yoshimura

This paper is designed to approach the theme of the novel *Close Quarters*, which was written as the tenth novel in 1987 by William Golding, the winner of the Nobel Prize for Literature.

For this purpose, first an attempt is made to compare the novel with the two other novels *Rites of Passage* and *Fire Down Below*, which were written respectively in 1980, 1989.

*Close Quarters*, along with *Rites of Passage* and *Fire Down Below*, makes a trilogy whose binding theme is the making of the hero's soul, although each of them respectively has its own theme in it. They are connected so closely in theme that they cannot be discussed separately. Therefore, it is at once necessary and useful to pay attention to the two novels, in order to understand *Close Quarters* without any errors.

Secondly an attempt is made to search for the meaning of the title of the novel. For the title "Close Quarters" seems to sum up the theme of the novel.

Lastly a comparison is made between the novel *Close Quarters* and so-called Bildungsroman, in an attempt to make clear some features which distinguish *Close Quarters*.

#### 1

*Close Quarters* はノーベル文学賞作家ウィリアム・ゴールドディングの第十番目の小説である。ただこの作品は他の小説のように、この一冊で完結した内容をもつ単独の小説ではなく、筋も内容も連続した三部作のうちの第二作として書かれたものである。第一作は1980年の *Rites of Passage*、第三作は1989年に書かれた、おそらく最後の小説となるであろう、*Fire Down Below* である。第一作と第二作との間に *The Paper Man* が書かれているが、これは内容的にも単独の作であって、第一作との直接的連続性はない。従って、第一作の *Rites of Passage* の最終章で次作に続くことが明記されている点や、両作品における登場人物及び筋の同一性という点から、次作とは *Close Quarters* であることは間

違いない。同様の理由から *Close Quarters* の続篇は *Fire Down Below* とすることができる。

ところで、作者が三部作とした所には、作者なりの意図があつたことだろう。もちろん、これらの三部作のうち一つだけ取り出し、個別に論じて、その意図を探ることはある程度可能といえる。しかし、三部作として書かれている以上、やはり、三つの作を相互に比較しながら考えを進める方が、より一層正確な作品理解に到達できるのではないか。

この試論では、三部作の一つという点を念頭に入れ、必要に応じて他の作と比較検討することにより *Close Quarters* への一つのアプローチを試みたい。その際、それぞれの作品のタイトルの意味も考えながら論ずるつもりである。実はこのタイトルは作品理解のうえで重要な鍵となっているからだ。

## 2

海洋冒険小説は海洋民族であるイギリス人が特に好む伝統的小説形態といわれる。ノーベル文学賞受賞のきっかけとなったゴールディングの出世作 *Lord of the Flies* も例外ではない。これは核戦争を避けて疎開の途中、絶海の孤島に不時着した少年たちの冒険小説である。もちろん、この小説は単なる少年冒険小説だけにとどまっておらず、人間の理性と獣性という重いテーマをその内に秘めた大人のための小説でもある。同時に三部作も舞台が海洋という点で *Lord of the Flies* と同系列の小説である。

三部作では、イギリスを出帆し、赤道を経て、オーストラリアへ向う軍艦の艦上が舞台となっている。時代的にはナポレオン軍と英国が交戦中の頃である。そしてオーストラリアに到着するまでの出来事がトールボット (Talbot) という一青年の目を通して報告される。読者はいわば彼の航海日誌を読むという形で物語の展開を追うことになる。

ところで、青年トールボットは語り手としての地位を与えられているとはいえ、物語を進める上で、すべてを知り尽くしている万能の作者の代理人として、人間及び人生に透徹した神の如き目をもって周囲の人間や事件を眺めるのではない。トールボットは、自分の思い込みとは逆に、人を見る目はいうに及ばず、自分自身をさえありのままに客観視する眼力はまだ備えてはいない。あるときは、自分の好みから将校デヴァレル (Deverel) を必要以上に高く評価もすれば、反対に、虫が好かぬという漠然とした理由から、船長のアンダーソン (Anderson) を過小評価する。さらに、好意を抱いている女性に対しては溺愛状態となり判断力は停止する。過大評価も過小評価も公平を欠くという点で未熟な判断といえるが、トールボットは、自分の私利私欲や打算や好悪の情のために判断の目が曇らされていることに一向気付かない。

そして、最大の欠点は自己認識の欠如である。彼は実は生れは船長と同じく孤児なのだが、現在は英国の政界の大物の後見と庇護の下にある

ために、自ずと鼻持ちならない貴族的優越感がしみついている。一方、実力者が後見人であることから、トールボットに対して意識的に好意を示す者もいるので、彼はすっかり自分が人かどの人間だと錯覚してしまう。彼は単に政界の大物である貴族の庇護の下にあるだけあって、彼自身は決して貴族でもなければ、実力者でもない。一介の青年に過ぎず、人の意図的好意は彼の人柄や人格を慕うがためではなく、彼の後見人の権威の力によるものだという事に気付かない。トールボットが然るべき自己認識を得て、無私の目を獲得するためには、まだまだ沢山の人生経験を積みねばならぬことがわかる。

このようにトールボットが精神的にまだ未熟な青年として性格付けされている点や、物語の進行に伴って、人及び自分を見凝める目が次第に変化してくることからも、青年トールボットは、作中において作者の代わりを務める単なる語り手ではなく、実はこの三部作の主人公であることがわかる。つまり、この三部作は青年トールボットを主人公として、その人間的自己形成の過程を追求した、いわゆる「教養小説」(Bildungsroman) の一変奏と解釈してよい。

このような観点にたって個々の作品を見るならば、三部作の第一巻の *Rites of passage* は、未熟な青年トールボットの人生への旅立ちの書といえる。ここでの話の中心は同じ船に乗り込んでいた牧師コリー (Colley) の事件である。コリーは人の模範として、他人を教え導く立場にありながら、思わぬところから姦通罪を犯してしまう。貞潔な人間だと心ひそかに自負心をもっていたコリーはこの事件によって自己に対する思い違いと同時に本当の我が姿を思い知らされ、慙愧と自責の念から死を選ぶ。これは自己の真の姿を見誤っていたコリー牧師の悲劇ともいえるが、事件の一部始終を知る青年トールボットにとっては初めて経験する衝撃的事件である。本や知識を通してしか人間を知らないトールボットは、当然のことながら、自己洞察力にも乏しい未熟な青年だ。好意的に見れば、若さ故の気取りや、自己に対する盲目的過信などが

あるとはいえ、本質的にはまだ無垢でかつ無邪気な魂といえる。こうした青年にとっては人間理解も人生理解もまだ教科書的な域を出ない。従って、そうした精神の段階にいるトールボットにとっては、コリーの事件は、いままで知らなかった人間の暗黒面の存在を開示する啓示的事件となる。特に人間の性的暗黒面を知らしめる契機となる。いいかえれば人生開眼の一機縁となる重大な事件としての意味をもって来る。

ところで、この第一巻にタイトルとしてつけられている‘Rites of Passage’という言葉が「通過儀礼」を意味することを考えれば、コリー牧師の罪と死はトールボットにとっては教科書的な人生から一步進んで、生々しい実人生へ到るために通らなくてはならない「通過儀礼」、いいかえるならば、「精神的割礼」の儀式の意味をもつものである。メドカーフ (Medcalf) は青年トールボットの自己形成の過程がこの三部作を貫くメインテーマである<sup>(1)</sup> としているが卓見という他ない。第一巻の *Rites of Passage* とは、タイトルからもわかる通り、そうした自己形成への旅立ちに際してトールボットが経験する最初の人生の洗礼を扱った小説と解釈できよう。

### 3

次は問題の第二巻 *Close Quarters* についてであるが、この小説も第一巻同様トールボットの自己形成の一部を扱ったものであることはいうまでもない。結論的にいえば、やはりここでも別の種類の洗礼を彼は受けるのである。ではそれはどのようなものなのか具体的に見ていくこととする。

第二巻の *Close Quarters* は第一巻と比較して大きな相違点が認められる。その一つは、この小説の中では事件といえる事件が皆無に近いことだ。第一巻では、姦通の事実が暴かれ、コリーが苦悶の果てに死を迎えるまでの経緯が周辺の人々の心の動きを交えながら述べられていた。そしてこれが第一巻をひきしめ、支える大黒柱の役割を担っていた。これに対し第二巻ではコリーの事件に比肩し得る大事件は見あたらない。トール

ロボット自身が、語るに足る事件も英雄もない<sup>(2)</sup>、とこぼして日誌にする材料の乏しいことを嘆いている位だ。事件として強いてあげるとすれば、霧の中から正体不明の船が近づいてきて、一同が緊張する場面位である。一瞬、緊迫した空気が流れ、敵の軍艦かもしれないとの想定に立って臨戦体制がととのえられるが、結局は敵ではなく味方の軍艦アルシオーネ号 (Alcyone) だと判明する。しかも軍艦からの知らせで、ナポレオンが敗走した結果、英国は勝利し、戦いが終わったことを知る。

大きな事件ではないが、小さな、いわば、スナップショット的な事件はその他にも見られる。トールボットとチャムリー嬢 (Chumley) との束の間の恋もその一つだ。盟艦アルシオーネ号と出会ったとき、乗組員の相互交流の目的で艦上パーティが開かれる。その折にトールボットはチャムリーに一目惚れしてしまう。すっかり恋の虜となったトールボットはチャムリーを自分たちの軍艦へ配置換えさせようとする。そして、今までの自分の船室を彼女のために空けて自分は別の部屋に移ろうとする。

また、海中に落下して死んだと考えられていた召使のホイーラー (Wheeler) がアルシオーネ号から亡霊の如く出現したことも一つの出来事といえよう。ホイーラーによると落下後アルシオーネ号に救助されたとのことで、元の軍艦に復帰後はトールボットの身の世話をすることになる。しかし彼は、最後にはコリーの亡霊にとり憑かれたようになりピストル自殺する。

一方、アルシオーネ号と別れた後、トールボットは見かけない若者とでくわす。ベネット (Benét) という若い将校であった。彼は実はアルシオーネ号のサマセット船長 (Summerset) 夫人の愛人であった。それに気付いていた船長は二人の中を引き裂くためにアンダーソン船長にひき取ってもらったのだった。一方、アンダーソン船長は、軍法会議ものの失態を演じた厄介者のデヴァレルを代わりにアルシオーネ号に引き取らせたことが次第に明らかになる。

その後、こまごました出来事として、嵐の揺

れに翻弄される乗客たちの狼狽の様とか、疲労困憊のありさまがトールボットの目を通して寸描されている。しかし、いずれの出来事も、第一巻におけるコリーの事件のように、小説全体を支えるだけの一本の太い背骨たり得ていない。つまり、小説全体を統率し支配するプロットたり得ていないのである。このように挿話は数多くちりばめられているにも関わらず、起承転結を持った群を抜く力強さと支配力をもった挿話は一つもなく、それぞれの挿話がほぼ均等な力関係でつりあいながら挿話の珊瑚礁を形成している。ここに第二巻 *Close Quarters* の特徴がある。

第二の特徴は、異臭、嘔吐、激しい振動、といった、いわば人間以外の要素が象徴的意味を帯びていることである。「嘔吐」は元来、生理的反応の一つにしか過ぎず、また「揺れ」とは、この場合、嵐による船体の揺れをさすのであるが、これらのものが繰り返し小説中に出てくる。そして、その繰返しと頻出によって、それらの要素が日常的意味を失って新たな意味を獲得し始める。つまり「嘔吐」は単に生理上のそれだけでなく、得体の知れぬ不愉快なものに対する精神的嘔吐にまで昇華される。また「揺れ」は単に嵐に翻弄される船の揺れではなく、正体不明な無気味な何者かの恐るべき揺れへと変貌する。作者ゴールディングは人間内部に巣食う悪の深淵をこのように感覚的に表現していると考えられるのだが、これに類する効果をもつものは上記の二つにとどまらない。船に漂う「悪臭」とか、船底に付着して時とともに次第に大きく成長し、船そのものを海底に引きずり込まんばかりの悪意に満ちた無気味な「藻」なども同様に象徴的意味をもたされている。しかも存在感という点で、これらの非人間的要素の方が、点描的人物たちより遥かに強烈なので、この第二巻の小説は人間よりもむしろ「悪臭」とか「嘔吐」とか、さらには「揺れ」などの非人間的要素が主役に躍り出た特異な小説という印象を与える。「悪臭」等々を表わす言葉の劇化<sup>9)</sup>を狙った小説という印象は極めて強い。特にこの小説を三部作の一

つという観点を抜きにして、一冊の単独作品として見てゆくなれば、言葉を劇化した小説という結論が出てくるのは当然の帰結である。そしてその結論は的外れのものでもなければ、不当なものでもない、しかし、今一度、この作品を三部作の一つとして眺めるとき、また別の解釈が成立し得る。従って、次には三部作という観点から上記二つの特徴を再検討してみたい。その上で問題としている小説 *Close Quarters* 全体の解釈を試みてみよう。

## 4

三部作全篇に流れるテーマは青年トールボットの自己形成だということは既に第二章で述べたが、第一巻の見直しのときと同様に第二巻の *Close Quarters* もその点から考えていくことにする。そこでまず、主人公トールボットの精神の推移に着目して、第一巻と第二巻を比較してみると、そこには大きな変化が認められる。

最大の変化は人を見るトールボットの目である。第一巻では何に関しても感覚的かつ感情的判断しかできず客観性を欠いた未熟者のトールボットであったが、周囲の人たちに対して未熟なりに一応の判断なり評価を下していた。ところが、第二巻の *Close Quarters* に到って、トールボットのそうした人物評が尽く逆転し全く正反対のものとなっている。この事実は、三部作がトールボットの自己形成の過程を主題とする一連の小説群であることの逆証明にもなっているのだが、次に彼の人物評の変化を具体的に考えてみよう。

最初にトールボットの一番の親友についてであるが、第一巻の *Rites of Passage* ではサマーズ (Summers) は生れこそ低い、船乗りとしての力量といい、人柄の良さといい、トールボットにとっては人生の水先案内人であり、人間的にも大人の人物と映っていた。サマーズが親切にしてくれることもあり、トールボットの方も彼を概ね好意的に見ていた。おそらく彼はサマーズの性格を見誤ってはいない。欠陥があるとなれば、美点ばかりに捉われすぎた結果、別の面

の見落としがあったことだろう。第二巻の *Close Quarters* では今度は見落としした部分を知ることになる。つまり、彼はサマーズが世俗を超越した人格者ではなく、同僚のベネットが船長に重用されることに対して嫉妬もすれば、より高い地位を求める上昇志向をもった俗世間的人間でもあることを知る。トールボットはようやく等身大のサマーズを知るに到ったといえる。

デヴァレルに対する評価も変化する。自分自身も気持ちの上では貴族階級出身のつもりでいるトールボットであったので、ましてや本物の貴族の出であるデヴァレルに対してはそれだけに最初から好意的であった。最初、トールボットの目には、彼は「紳士然とした将校」と映っていた。しかし、続く第二巻では彼に対する評価は一転する。高貴そうに見えた彼は実は酒の力を借りて大言壮語する墮落した人物であったのだ<sup>(4)</sup>。

一方、評価の下った人ばかりではなかった。逆に上がった人たちもいる。たとえば、ブロックルバンク (Brocklebank) はその一人である。以前は彼は単なる泥酔家とばかり思われていたのだが、第二巻では意外にも精神の強さを発揮する。たとえば、病気のため死にそうになるが決して死に対してひるみはしなかった。かえって毅然たる態度で臨み、泰然と死を受容して人間らしい最後を迎えようと決意する<sup>(5)</sup>。普段は紳士然としてはいるが、真の勇気と高潔さが試される危急の折りには自己本来の卑小さを露呈して顧みないデヴァレルとは天地の懸隔がある。彼の卑小さは、たとえば、トールボットに戦いの仕方を教授する場面にも如実に出ている。彼の教えとは、もとより正々堂々と戦えというようのものではなく、敵の身体的急所、たとえば股間を狙って機先を制せよ<sup>(6)</sup>、というものであった。彼はいざという時になりふり構わぬ人間なのだ。

もう一人、評価の変化した人物として見逃すことができない人がいる。それはアンダーソン船長だ。

彼は私生児という不幸な生立ちを背負っているせいもあり、陰鬱な表情をしている場合が

多い。また性格上の気難しさもあり、トールボットならずしも彼から余りよい印象を受ける者はいないが、ご多聞に洩れずトールボットも彼を気難しいエゴイストと決めつけてしまっていた。ところが、彼は例のヒーラーから意外な言葉を聞く。他人への思いやりなどないエゴイストだとばかり信じて疑わなかったトールボットは彼の口から、アンダーソンは「立派な船長」<sup>(7)</sup>だと聞かされる。しかし、彼のこの言葉は決して打算的思惑とか、船長に対する依怙夤縁の表われではない。

ヒーラーの言葉の真実性は船長のとった二つの行動によって証明されている。それは長期のしげに悩まされ、厨房用燃料が不足した時のことである。船長のアンダーソンは自分の部屋の灯火を消すようにといいつける。厨房用にまわすためである。

またもう一つは、似而非紳士デヴァレルに対する対応の仕方である。

デヴァレルは、船が航行の自由を失ってしげの中をさまよう結果をひき起こした張本人である。彼が、交替の時間を待ちきれずに、見張りの義務を怠って酒を飲んでいる間に、突然風向きが変わり帆柱が大破してしまったのである。海ではわずかの過失も命と直結しているのに、そうした義務違反は軍法会議ものとして懲罰が課されるのが掟なのだが、結局、総責任者のアンダーソンは彼をアルシオーネ号に移し変えることで罪を不問とする。デヴァレルが平生より立派な紳士であったからではない。それどころか、罪を恐れた彼は軍人としての廃業を申し出て、その罪を逃れようともくろみ、船長との直談判を企てる。そして思いあまって船長に悪態さえついている。これが、コリーの罪を糾弾する急先鋒にたった彼のとった行為である。彼の行為は、危険防止や、統率上の必要上、海の上では絶対的であるべき船長の権威を危くしかねない行為なのだが、最終的に彼を許した裏には外面からは容易に察し得ない船長の寛大な心があるのである。言葉ではなく、なす行為によって判断されねばならぬ人間が船長その人である。

以上、いくつかの人物評の変貌をみてきたが、変化はトールボットの周囲の人たちばかりにとどまらず、トールボットその人自身にも及んでいる。

植民地統治の仕事に参加する任務を帯びてオーストラリアに向かっていったトールボットは任地で経験を積んだ後は本国で代議士になろうという、青年らしい青雲の志を抱いていた。一方、本国イギリスの政界の大物が庇護者ということで、彼自身も自然と他の人に対して尊大な態度をとった。また柄にもない貴族意識さえもち、自ら名誉と礼節を尊ぶ知性の人と自負してもいた。ところがチャムリー嬢との出会いを境にして、トールボットは一変してしまう。彼女に対する思いは一通りなものではなく、理性を欠いた痴愛といってもよい。泥酔の上での彼女に対する人目を憚らない強引な愛情表現とか、アルシオーネ号から彼女を略奪して自分の船に連れ帰り、許可なくそのままそこに住ませようとする。そのために、自分は別の部屋へ移り、自室を彼女のために空けてやろうとする。またこれまでの志も彼女のために捨てても構わないと思う。このような無作法さや身勝手さ、さらには変節的行為などは周囲の鬨聲や失笑的になりこそすれ、彼の人柄を高めるものではない。名誉と礼節を尊ぶ知性人を自任するトールボットがなすべき行為とは思われない。いかに愛する者のためとはいえ、行きずりの女性のために今まで大切に思っていた地位や名誉、さらにはこれまでの節をいとも容易に投うつ行為<sup>9)</sup>は痴人の愛そのものといわねばならない。

しかし、トールボットは本来、節の名に値する本物の節も、名誉を大切に思う真の名誉心も身についてはいなかったのである。人間的に未熟な者が精一杯背伸びして大人の真似をしていたにすぎない。チャムリーとの恋は自己に対する、若さ故の盲目的かつ無反省な買いかぶりを思い知らせると同時に、意識の上での自己と未熟者としての本来の自己との埋め難いずれを明らかにしているのである。このように、第一巻では背伸びしていたトールボットは第二巻の

*Close Quarters* では本来の等身大のトールボットへと変貌する。

これまでトールボットも含めて周辺の人々の変貌を見てきたが、変貌の事実は第一巻における各々の人物の元の姿と比較して初めて了解されるのであって、もし仮に第二巻の *Close Quarters* のみに限定して読者が人物を眺めるとすれば、当然のことながら、何の変化も見い出すことはできない。

先にも述べた通り、*Close Quarters* を単独の小説として読む場合、そこには二つの特徴が認められた。一つは人間以外の要素、たとえば「揺れ」とか「悪臭」などの劇化であった。

しかし観点を変えて、三部作の一つとして読むと事情は一変した。*Close Quarters* において雑然と並列されていた一群の小さな出来事や様々な人物に関する寸描は、実は主人公トールボット自身の、人やものを見る目の変貌を示すためのものであったのだ。つまり *Close Quarters* は事件そのものが主題ではなく、成長途上の青年トールボットの目の変化や推移が主題となっている小説なのである。事件性の欠如もそのためと考えると間違いない。そして第二巻につけられた小説の題名 '*Close Quarters*' という言葉も、こうした解釈を可能にしてくれる一つの根拠となる。 '*Close Quarters*' とは「接近戦」の意味である。

第一巻の *Rites of Passage* においては主人公のトールボットは周囲の人々を遠目で見ている。つまり深くかかわることなく、一定の距離を置いた安全な地点から周りの人々を眺めている。従ってそれは外面的な理解が多く、真の人間理解となっていないことが多い。それ故、第二巻の *Close Quarters* において全面的な修正や再認識を迫られるのである。そして、このことからわかるように *Close Quarters* における各々の人物像は遠目ではなく近目から眺めた姿といえる。もちろん悪い意味での近視眼的理解というのではなく、「接近」した地点から眺めた姿、または理解という意味である。遠目には立派な人間も、一度その身近に接近して詳細に見るならば評価は

一転する。その人の精神生活の息遣いが感じられる極めて接近した距離からは否応なしに人間の赤裸々な姿や、むきだしの欲望とか野心までも仔細に伝わってくるからである。英雄とか人格者としての世評を持つ者も身近に仕えている側近にとっては英雄でも人格者でもなく、むしろ普通以上に世俗的欲望にまみれた亡者にしかすぎないことがあるのはそのためだ。もちろん先に見た通り評価が良い方に転ずる者もいる。遠目には気難し屋のエゴイストに見えたアンダーソン船長が近目では一転して寛容の人となったのはその一例といえる。第二巻のタイトルとしてつけられた‘Close Quarters’つまり「接近戦」という言葉は良きにつけ、悪しきにつけ、そうした人間のむきだしの本質が露呈されずにはいない極めて「接近した距離」を意味しているものと思われる。そして、第二巻のもう一つの特徴であった「悪臭」、「嘔吐」、さらには激しい「揺れ」や船底の無気味な「藻」などは、例外はあるとはいえ、概して見るに耐えないそうした人間のむきだしの本質にトルボットが「接近」もしくは「直面」していることを感覚的に暗示するために繰り返し反復されているものと考えられる。

ところで、本来、‘Close Quarters’という言葉は「接近戦」または「白兵戦」という語義からも判断できるように戦争用語である。こうした言葉の使用理由の一つはトルボットの人間理解を容易ならざる一つの「戦い」と捉えた上での命名だと推察される。しかし、ともあれ、第二巻のタイトルのつけ方はこの小説の内容を要約している一語であることは異論の余地はない。

## 5

最後に伝統的な教養小説との比較によって *Close Quarters* の特異性を探ってみよう。

さまざまな面において未熟な青年トルボットが彼なりに経験を積んで周囲の人間や自分自身をよりよく理解する目を獲得していく過程が描かれている点で、小説 *Close Quarters* は主人公の自己形成をテーマとする、いわゆる教養小

説の系譜に属する作品として位置付けることができる。しかし仔細に作品を見るならば *Close Quarters* は伝統的教養小説には見られない点が見られる。

主人公のトルボットが未熟なために判断や認識を誤る点は確かに伝統的教養小説の主人公とよく似ている。しかし、両方の主人公の判断上の過誤や認識不足の原因は大きく異なっている。伝統的教養小説においては主人公が精神的成長過程でしばしば犯す判断上の誤り、認識不足は主人公自身の若さとか経験不足といった、いわば成長過程での未熟さに由来する。そして、この未熟さは主人公の成長と共にいずれ克服されるのが常である。つまり改善可能な原因によるのである。ところが *Close Quarters* では、主人公トルボットに見られる認識不足や判断ミスは単に若さ故の未熟さとか、経験不足のみに原因しているのではない。それは一言でいえば、墮落した存在としての人間のもつ宿命的欠陥に起因しているのである。つまり、トルボットが自他に関する判断を誤ったのは、意識的であれ、無意識的であれ、彼が何よりも、自負心、野心、打算、等々の欲望にまみれた存在だからである。そのために、自他に関して自分の都合のよいようにしか判断できず、客観的中立性を欠くからだ。しかも悪いことに、判断を歪めている自己のエゴイズムの存在に目をつむっている。もちろん、彼は、実際にはエゴイズムに基いた判断や見解や主義主張をさも正当性をもったものであるかのように見せかけるために、もっともらしい大義名分や、もっともらしい理由をつけて、不当に自己正当化するまでには至っていないけれども、他を欺き自らも欺く、そうした許されざる自己隠蔽の罪に陥る危険は極めて高い。

人間は好むと好まざるとに拘らず、生れながらに欲望の存在である。そのために、理窟はどうであれ、自分の都合のよいようにしか物事を見ないし、行動しない。それは宿命としてやむを得ない。がしかし、そうしたエゴイズムに基いた見解や行為に大義名分の美服を着せて正当化し恥じることもなく、良心の痛みも感じない



場合は問題である。こうした欺瞞的自己隠蔽の中にこそ、ゴールディングは人間の罪深さ、救い難さの一つの表われを見るのである<sup>(9)</sup>。

従って、ゴールディングにあっては、公平かつ無私の判断などというものは、およそ人間の能くし得る業ではない。また、無私の判断や行動が人間には可能とする短絡的人間観は人間に内在する暗黒の本質についての洞察を欠いた片手落ちな見解として斥ける。そして教科書の説くような単純な人間観のみを信じて、人間性の闇に目を向けようとしない現代人の姿の中に現代の病巣の根深さを見てとるのである。トルボットこそはまさにそうした病める人間の代表に他ならない。「人間は墮落した存在だ。人間は原罪の牢につながれている」<sup>(10)</sup>と述べるゴールディングの主張の中には彼の人間原罪説が明確にされている。また、「蜜蜂が蜜を作るように人間は悪を生む」<sup>(11)</sup>という彼の言葉には、悪をなさずしては生きられない人間の宿業が表明されている。

第二次大戦以前のゴールディングは、健全な社会を実現すれば、社会悪は取り除かれ、健全な社会と人間ができあがるという信仰を抱いていた<sup>(12)</sup>。彼は人間の善性と理性に信頼を置いていたのだ。ところが大戦後はその人間信仰も崩壊する。自ら一兵士として参戦した経験が彼に人間の本質に対する洞察の機会を与えたのである。彼は多くのこの時期の作家達と同じく、お

そらく人間の理性の敗北を思い知ったのであろう。

*Close Quarters* という作品は、以上のような人間観と精神遍歴を経験した作家ゴールディングの手になるものであり、その人間観が色濃くにじみ出ている独特な教養小説といえることができる。

<注>

- (1) *TLS* (March 17 – 23, 1987)
- (2) William Golding, *Close Quarters* (London : Faber and Faber, 1987), pp.6–8  
以下本書からの引用はこの版によるものとする。
- (3) Rosemary Ashton, “Becalmed,” *The Listener*, (June 1987)
- (4) *Close Quarters*, p.78
- (5) *Close Quarters*, p.241
- (6) *Close Quarters*, p.46
- (7) *Close Quarters*, p.187
- (8) *Close Quarters*, p.103
- (9) 人間は原罪を背負った存在とするゴールディングの考え方は、次の評論集の中に詳しく述べられている。  
William Golding, *The Hot Gate* (London : Faber and Faber, 1984), p.87
- (10) *The Hot Gate*, p.88
- (11) *The Hot Gate*, p.87
- (12) *The Hot Gate*, p.86